てそれら調査結果を踏まえ、ワークショップの今後の可能性や限界、これからの建築家の役割等について展望した。

氏名　02 GTA-02　　後　藤　和　政
研究題目名　時空間的・生態的観点における移動空間の考察―ストリート性を中心として―
指導教授　上和田　　茂

現在、移動するための空間が人間の開発してきた道具によって様々に変化し新たに発生してきた。そしてその道具や、それを生み出した知識によって時間と空間は、完全に分離されるようになった。時間という概念が経済的な側面で扱われ、客観化されているので、一様に過ぎ去り重要視されている。

それ故に空間は出発点と目的地の明確化、その間の短縮化をたどっている。そうなると移動空間は実に味気ないものになっていってしまうだろう。本来重視すべきはプロセスであり、それは移動空間である。移動空間がなければ出発点も目的地も無いのである。仮に移動空間が無いということは移動時間もないということである。この仮定が成り立ってしまうならばその人間は完全に停止しているのと同等である。

そこで最もプリミティブでヒューマン・スケールである歩行による空間、つまりストリートを考え、時空間的・生態的になにが人間にとって移動空間に必要なのかを考察する。

氏名　02 GTA-03　　タイアブ　ハイダル
研究題目名　リビングルームにおけるBE空間とDO空間の分離の有効性に関する考察
指導教授　上和田　　茂

住宅の居間は多目的空間である。そこでは団らんやくつろぎの行為と多様な作業や活動が併存する。しかし、くつろぎの場である居間において作業や活動が行われると、くつろぎの機能が著しく低下し、作業効率も悪い。

本研究では、主にくつろぎの場をBE空間、家事などの多様な作業や活動を行う場をDO空間とそれぞれ称し両者を分離することにより、この問題を解消できることを想定し、居住者のアンケート調査を通してその有効性を明らかにすることを目的とする。

調査の結果、7割以上の世帯がDO空間は必要であるとし、居間における生活行為の実態および居住者の希望から、DO空間が持つべき主な役割は「家事」、「学習・情報」、「収納」であることが明らかになった。また、居間とDO空間の関係は、両室は区分されながらも半ば開放的につながり、配置は南側に面し、台所とのつながりも強いものが望ましいということが判明した。

氏名　02 GTA-04　　丸　田　健　一
研究題目名　風景イメージの曖昧さに関する試論
指導教授　上和田　　茂

風景イメージの曖昧さに関する試論とは、大きくわけて2部構成となる。

Ⅰ部においては、これまでの風景論が、庭園、風景、景観、ランドスケープという各分野において、一体どのような曖昧な姿であったかを考察した。その結果を踏まえた上で、これからの特に風景論を考えていく上で、重要になるであろう「イメージ」という分野を視野に入れながら、風景論を考え直すことの重要さが把握された。

Ⅱ部においては、Ⅰ部の「イメージ」との関連で、テレビにおける「CM」という新たなメディアに着眼した考察を加えた。

CMを解析していく上で、景観と関わりをもって映し出されているであろう、外の景色、人物、産業という3つの点に特に焦点を当てていく。

上記の解析と考察によって得られた結果をもとに、日本における景観論のあり方に、新たな視点を導入することの必要性を整理し、その結果を試論とした。